

SALAD BOWL

Vol. 12

～Fresh material sent direct from the real medical scene～

東葛病院・代々木病院から 医師を目指すあなたへ

医師を目指すみなさん、こんにちは！代々木病院の医学生室の高橋です(*^-^*)

今回のサラダボウルは、東葛病院救急科科長の後藤慶太郎先生の『ER ドクターG 奮戦記 Vol2 「気になる患者カンファレンス」』をお送り致します！

ER ドクターG 奮戦記 Vol2 「気になる患者カンファレンス」

皆さん、お久しぶりです。お元気ですか？東葛病院のERで救急をやっている後藤です。兵庫県の神戸市出身です。野球は阪神タイガースのファンです。今はサッカーワールドカップが盛り上がっているので、そっちで盛りあっています。好きな食べ物はトマトです。プチトマト、青さ残るまだ熟れていないトマト、高級なフルーツトマトまで何でもこよなく愛しています。

後藤のGをとって、「ER ドクターG」と呼んでください。ドクターGは、こう見えても小学校1年生からサッカーをやっていました。漫画「キャプテン翼」が流行る少し前から地域のクラブチームに入っていました。「大迫、半端ないって」が流行語になっていますが、あのナイスキャラなキャプテンがいた滝川第二高校は、ドクターGの実家の近くにあるんですね。

そういえば、自分の住んでいた地域でサッカーが得意な友達は、滝川第二高校に進学していました。

今回のサラダボウルでは、「半端ない」患者カンファレンスではなくて…、「気になる患者カンファレンス」についてお話しします。ER（Emergency Room、救急外来のこと）を受診する患者さんの中には、「気になる患者さん」がいらっしゃいます。例えば、ある高齢者の女性がERを車いすで受診されました。発熱などで明らかに具合が悪そうです。しかも普段から介護が必要そうです。普通に考えると、付き添いで来るのは、娘さんか息子さん、お嫁さんと思いますよね。それが、高齢の男性＝夫だったらどうでしょう。いわゆる老老夫婦で介護や生活に苦労をされていないか気になりますよね。しかも夫婦で認知症があったりすると、ますます心配になってしまいます。入院することになれば、ゆっくり状況を聞いて必要な援助の計画が立てられます。しかし、帰宅された場合、詳しく聞き取ったり、関わったりすることが難しくなってしまいます。特に忙しい救急外来では気になりつつも、「聞きそびれてしまった」ということが多く、「あの患者さん、大丈夫かな？気になるな」となります。

ERに限らず、内科外来、小児科外来でも、「あの患者さんのここが気になる」「何か変だな」と感じる患者さんがいらっしゃいます。しかもそういう患者さんが、実はERにも内科外来にもかかっているのに、スタッフ間で情報が共有されていなかったり、小児科で気になる患者さんの親御さんが内科にかかっていたりすることを経験します。

そういうことで、先日、普段みんなが気になる患者さんを出し合って話し合おうと呼びかけ、外来の部署を超えてみんなで集まり、「気になる患者カンファレンス」を開催したのです。東葛病院ではやっているようで、やっていなかったの、第1回の記念すべきカンファレンスとなりました。



今回のカンファレンスに全体で **50 人を超えるスタッフが参加**してくれました。ER のスタッフが中心になってカンファレンスと呼びかけました。こんなにたくさん来てくれると、思っていなかったので、とても嬉しかったです。

内科のスタッフから出されたケースです。「50 歳代の男性だが、アルコール依存症がひどくて、やっと家族に連れられて受診した。先生からお酒をやめるつもりなら治療をするので、次回受診してくださいと話しましたが、その後受診していない。どうしたらいいのか？」との相談です。人によっては「お酒を飲み続けるのは本人の意思。本人にお酒を断つ気持ちがあれば、病気は良くなるので、病院に来る意味はない」という考え方もあるでしょう。でも**スタッフとしては、やはり何としても治療につなげたいという思い**です。参加しているスタッフからは、「自宅を訪問してはどうか?」、「市役所と連携して入ってもらうのが良いのではないだろうか」、「往診に入っている母親を通して、男性に断酒をすすめてもらおう」など、意見やアイデアが出されました。



参加者全員が胸を打たれるケースが報告されました。10 歳代の女の子が、とある病気で小児科外来を通院していました。本人から、女の子の両親は離婚しており、お母さんは末期がんの状態だということをスタッフは聞いていました。最近、おじいちゃんが小児科外来に連れてきてくれますが、おじいちゃんも認知症が進行してきていて、付き添いも危うげになってきています。この女の子には弟がいて、弟くんはそういう家庭事情なので、里親に出されたそうです。ここまでだと、「大変そうなお家庭だな」で終わってしまうかもしれません。このカンファレンスには、たまたま別のケースで関わった緩和ケア病棟（注 1）の看護師さんが来てくれていました。その看護師さんが様子を語ってくれました。

た緩和ケア病棟（注 1）の看護師さんが来てくれていました。その看護師さんが様子を語ってくれました。

お母さんがいよいよ終末期（注 2）となり、緩和ケア病棟に入院されました。女の子とお母さんは仲良くおしゃべりをしていましたが、弟くんは面会に来て、来る日も来る日もお母さんに会わないで、待合室ですっとスマホをいじっています。看護師さんが「どうしたの?」と声をかけました。弟くんはお母さんと喧嘩をしたきり、仲直りできていなかったのです。でもずっとスマホをいじっていたのは、**お母さんとお互い「好きだよ」とやりとりした LINE のメッセージを見返していた**のです。「それじゃお母さんと仲直りしよう」と、その頃には意識もぼんやりしていたお母さんの手を弟くんは一生懸命さすってあげました。その後弟くんはお母さんとの失われた時間を取り戻すように、ずっとそばに付き添いました。いよいよお母さんの死期が近づいてきました。女の子がお母さんに言いました。「わたし、大きくなったら東葛病院の看護婦さんみたいに優しい看護婦さんになりたい」と。「ほんとに！お母さん、うれしい！」それがお母さんの最後の言葉となりました。

今回のカンファレンスを通じて、**患者さんの願いや希望を実現するために、スタッフが集まって知恵や力を出し合う大事さ**を身に染みて感じました。参加したスタッフからも「参加してよかった、ぜひ次回も開催してほしい」と好評でした。

今度は、「“半端ない”患者カンファレンス」を開催してみようかな！どんなカンファレンスかって？それはもう、「半端ないって！」お楽しみに！



皆さんいかがでしたか？今回の内容を深める企画として、8月25日（土）に「ERを究める事情のわけ」という後藤慶太郎先生を講師にした高校生リピーター企画を開催します。興味のある方は是非参加してください！詳しくはリピーター企画のチラシを Check！

注 1) 緩和ケア病棟・・・末期癌(まっきがん)患者などの痛みの緩和と看護を担当する病棟。(デジタル大辞林より)

注 2) 終末期・・・病気の進行が進み、死期が近づいている患者に対して行う医療。(デジタル大辞林より)